

<祈りのすすめ>

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」
(マタイによる福音書 11章 28節)

悔い改めない人々が主イエスを受け入れず、批判して殺そうとしていた「そのとき」、主イエスは「父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかに、父を知る者はいません」(マタイ 11:25~27)と祈られます。

父なる神は、ご自分の公平さと義を貫くお方です。人間の罪に義をもって裁くことが神の義の実現です。そのため神の御子は、罪人の真ん中に立たれ、神の怒りと裁きに従順を尽くすことを決心され、バプテスマのヨハネから洗礼を受けて十字架の道を歩まれました。彼は、父なる神の公平さと義を真直ぐに受け止め、私たちの受けるべき神の罰をご自分が受けられました。こうして私たちは神に支払った者として、すなわちキリストと共に神に対して従順に死んだ者にしてくださったのです。これが「父のほかに子を知る者のない」方の歩みです。

それゆえに、主イエスは「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(28節)と、招かれるのです。真の安らぎは「わたしは柔和(友好的)で謙遜な者だから、わたしの軛(くびき)を負い、わたしに学びなさい」(29節)と言われる主イエスの言葉にあります。

今日も、極悪に満ちているこの世の権力者によって「天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろう」(マタイ 11:12)としています。この世の偶像礼

拝という軛が私たちに縛りつけ、多くの人は疲れてその重荷に抑えられています。教会はその軛との闘いをキリストの軛として背負うのです。「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」(30節)からです。それは主イエスの福音によって、「功なくして罪の赦しを得、神の子とせらる」からです。そのとき、壁のような苦難が目前にあっても、それをキリストの軛として担うとき、そこにこそ罪を償われた者の安らぎがあるのです。キリストの軛として負うことは、教会の肢々と共に負い合い、共にキリストの従順を学ぶことです。そのとき、これまで不安だけが覆いかぶさる苦しみであったものが、希望の見える苦しみとなるのです。

今やこの国は、アジアと世界の中で孤立しています。この国が70数年前の許されがたい罪に満ちた負の遺産を継承しているこの「とき」、私たち教会は、植民地にされたアジアの人々の叫びを聞いてきましたが、まだまだ足りません。彼らはどれほど、この国とこの国の人々に向けて不公正さを訴えていることか。その叫びを教会はもっと正面から受け取るべきです。神は、私たちの「無感覚と無気力は刺すだけでは足りず、更に、鞭を強く打ち込み、鉄槌で打ち砕く」(綱要3:3:7)ようにして、教会の罪ある目を開かれるのです。神の恩寵と無条件の罪の赦しが、十字架という償いをもって生きる苦難の道へと促すからです。そこにこそ、世の終わりの希望を待ち望む信仰者の真の安らぎがあるのです。

<祈り> 父なる神よ、私たちはどんなことがあってもつまずかず、目の前に不安が起こっても逃げ出さず、自分を投げ捨てず、さげすみをうけても苦しみを受けても、すべてあなたから分け与えられている恵みであることを知って、あなたの希望の世界に飛び立つ者にしてください。
川越弘(大会靖国問題特別委員会委員・沖縄伝道所牧師)

新シリーズ『いま なぜ 大嘗祭か』を読みなおす（12）

古賀清敬（北海道中会宣教教師）

Q13 キリスト者にとって象徴天皇制のどこが問題なのですか？

A 戦後民主的改革が「国体護持」を大前提にして行われたため、多くの問題を残してしまっただけです。まず、今回の天皇代替り（*1990年）で明らかになったように、天皇が神格化される危険性が常につきまっています。天皇が「天皇」と呼ばれ、「君が代」が歌われ、「日の丸」の旗が国旗として振られ続ける限り、天皇が神格化される危険性から抜け出すことはできないのではないのでしょうか。

また、「お国のために死んだ者」を祭る靖国神社に、「天皇」が参拝することを最高の荣誉と考える人々が少なくないこの国の現実において、そして「天皇」の問題をタブー視して相対的な問題として論じることのできない中で、さらに「元号」という制度で天皇によって自分たちの時間を区切られることが法によって規定される状況の中で、キリスト者はその生活のすべてにわたって信仰を貫くことに困難を覚えるようになります。

そしてまた、「天皇」の存在が、人の仕事の価値評価をしたり（勲章）、天皇が各地を旅行するたびに障害者の外出が禁じられるなど人権が無視されたり、皇位継承問題が、わが国では男女差別の源泉となったり、わが国とその国民が近隣の他の国よりも優れた民族であることが強調されたりなどしています。

「象徴天皇制」は、天皇統治の昔と違って国民主権・民主主義の制度の下にありながら、なお現実には「神格化」の問題や、「差別」の問題の根源となっています。そしてそれをなかなか克服することのできない現状では、いま一度この制度を相対的な問題として、根本的に考え直すべきではないのでしょうか。

新Q13. 前回に危惧されていた上記の指摘は、杞憂にすぎなかったのでしょうか。

新A13. いいえ、現に代替りに向けて学習指導要領が改訂され（1989年）「日の丸・君が代」が強制され、それに抵抗した教師たちが続々と処罰され、今もその闘いは続いています。「管理職の指示には従うもの」「職務専念義務」の口実で、思想・良心の自由や表現の自由が抑圧されています。他方、スポーツ競技では参加者や有名人に「君が代」を歌わせ、天皇中心の国民一体感が刷り込まれています。天皇とのほんの一瞬の会見や会話が一生の光栄とを感じるような感性は人々の中に根強く残っています。かつての神格化も、反対者への弾圧と大衆への榮譽感情浸透とが表裏一体となって進行したのが歴史の実態です。

今回の代替わり儀式も皇室神道丸出しで、天皇としての資格は皇祖神から由来することが主張され、「国民の総意」によることを否定する憲法違反であり、皇室の私的な儀式に公費を使うという政教分離規定違反が強行されたにもかかわらず、多くの人々はそれをなんとも思わないまでに天皇特別扱いを当然視するよう

になっています。

「象徴天皇とは何か」を前天皇が真剣に追及し、「国民と共にある」ために全国を回ろうとも、それは極めて選別され限定された人々との面談にすぎません。むしろ新たな天皇特別視を増長させただけです。裕仁天皇の戦争責任を子として「慰霊の旅」を行ってきた「誠意」とは裏腹に、政府の法的な責任を曖昧にさせ、それを否定しようとする政権に悪用されてきました。それはまた、天皇が「追悼」したからよいのではないかと、多くの日本人自身の戦争責任問題を曖昧にさせる要因ともなっています。

今回、「国民祝典」に際して「天皇陛下万歳」の連呼が扇動されたように、天皇元首化・神格化をめざす勢力が現政権の支持母体であり、その危険性は以前にもまして高まっているのです。そうした勢力が、教育基本法の改悪（愛国心）で育った「従順な」人々に、公文書の改ざんや破棄をさせたり、大学入試の民間委託など、教育への利権がらみの政治的な介入を行ったりしているのです。天皇神格化と愛国心を口実とした利権追及こそ、かつての侵略の本質なのです。

1966年、沖縄統治の最高責任者の就任式で「この高等弁務官が最後の高等弁務官になるように」と祈った平良修牧師とエルダー宣教師の50年ぶりの再会

西浦昭英(沖縄伝道所)

2019年8月、全国キリスト教人権教育セミナーで、会場校であった大阪女学院大学の錦織理事長に声をかけられました。「平良修牧師(現日本基督教団うふざと伝道所)のお祈りで相談にのったエルダー宣教師が、大阪女学院大学の名誉教授で、92歳でお元気です」。

大変驚きました。後で平良先生に聞くと、50年お会いしていないという事で、何とかお二人を再会させたいと思い、動き始めました。11/20-22の3日間の来沖が実現したのですが、これはプライベートな旅行ではなく、大阪女学院が宣教師の歴史の調査・聞き取りとして取り組むとしてくれました。大阪女学院副理事長の長谷川洋一さん(池田教会長老)が尽力され、沖縄に同行されました。

50年ぶりの再会の様子を、地元の新聞社が好意的に報道してくれました。「米軍占領下の沖縄の教会」という、クリスチャン向けの集会を企画したのですが、雨まじりの天候にもかかわらず、160人の参加者が来てくれました。100人収容の大教室でも席が足りず、大慌てで椅子を追加しました。

11/22、エルダー宣教師は、与那原教会の信徒である、^{あだにや}安谷屋初子さん(100歳)、^{へんとな}辺土名貞子さん(98歳)と、50年ぶりにお会いできました。その後、念願だった魂魄の塔でも祈りをささげることができました。

(以下、沖縄タイムスの記事を引用します。若干手を加えました)

沖縄が米軍統治下にあった1966年、最高権力者だった高等弁務官の就任式で、米軍支配を批判する祈りの言葉を述べた平良修牧師(87)に会うため、当時祈りの言葉に賛同した大阪女学院大学名誉教授のウィリアム・エルダー宣教師(92)が20日、大阪府から来沖した。

1966年11月、当時34歳でアンガー第五代高等弁務官の就任式に臨んだ平良牧師。米国の施政権下に置かれた当時の沖縄で絶対的な権限を持ち、政治、経済、社会のさまざまな分野に大きな影響を及ぼした権力者に「最後の高等弁務官となり、沖縄が本来の正常な状態に回復されますように切に祈ります」と述べ、沖縄内外で話題を呼んだ。平良さんは就任式前、エルダーさんを含む複数の宣教師に祈りの言葉について「文法に誤りがないか見てほしい」と相談。ほかの宣教師が内容について戸惑う中で、エルダーさんは「これはあなたの祈りです」と背中を押したという。エルダーさんは日本キリスト教団から宣教師として派遣され、66年から3年間を沖縄で過ごした。「自らに置き換えた場合、平良さんの言葉は当たり前のことだと思った。私は軍から派遣されているわけではない。祈りの内容は反発を呼ぶことは分かっていたが、覚悟していた」と語る。

平良牧師は「当時、米軍統治や支配に対する拒否感が強くあった。あの状況は異常で、日本に戻ることが正常であると思っていた」と振り返った上で、名護市辺野古で新基地建設工事が進んでいることなどに触れ、「今は沖縄県になっても、正常ではないと思う。今祈るとしても、まだ正常ではない、という立場から祈るだろう」と語り、エルダーさんも深くうなずいていた。

- 「あるアメリカ人宣教師の軌跡～ウィリアム・エルダーさんと沖縄」は、関西学院大学の製作。約60分。Youtubeでも見られます。エルダー宣教師で検索。

https://www.youtube.com/watch?v=gl2wL4V_CfA&list=PLu5CHIKo-lOjKcpvl2rVsbX5aFnFmKghb

映像は3部に分かれています。エルダー先生は、復帰運動の行進(デモ)に、アメリカ人として(多分)ただ一人参加していて、まわりからスパイに見られることを心配されていたこと、他のアメリカ人が持っていた、基地に自由に入出入りできるパス(通行許可書)を申請しなかったこと、病院に入院した際、日本人医師から、設備が良い米軍基地内の病院への転院を勧められても従わなかったことなど、大変魅力的な方です。

- 「こころの時代『イエスと歩む沖縄』」2013年12月22日 NHK・Eテレで放送されました。著作権の関係からか、映像はありませんが、台詞をすべて起こしているものがあります。

<http://h-kishi.sakura.ne.jp/kokoro-626.htm>

<ヤスクニ関連ニュース>

○「安倍首相ごり押し「軍艦島」の世界遺産報告書から「朝鮮人の強制労働」を削除！国際公約を反故にして徴用工問題消し去る安倍政権」

戦中に日本に連れてこられ、過酷な環境下での労働を強いられた朝鮮人徴用工問題をめぐり、またもや日本政府の歴史修正主義があらわになった。2015年にユネスコの世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」についての最新版「保全状況報告書」（内閣官房作成）が今月、ユネスコのホームページで公開されたのだが、そこに朝鮮人の強制労働の記述が一切なかったのだ。・・・日本側は、2015年の世界遺産委員会で、「その意思に反して連れて来られ、厳しい環境の下で働かされていた多くの朝鮮半島出身者等がいたこと」を認め、「第二次世界大戦中に日本政府としても徴用政策を実施していたことについて理解できるような措置を講じる」（内閣官房『産業遺産情報センターの在り方等について{第一次報告書}』）と約束していた。ところが、これが2017年に日本側がユネスコに提出した「保全状況報告書」では、朝鮮人徴用工について「戦前、戦中、戦後にかけて日本の産業を支えた多くの朝鮮半島出身者がいた」という記述で、強制連行や強制労働の実態を矮小化。そして、今月出された最新の「保全状況報告書」では、朝鮮人徴用工について一切触れなかったのだ。・・・(LITERA:12, 7)

○「雨に負けず阻止訴え 県民大行動 辺野古で750人」

名護市辺野古の新基地建設を巡り7日、米軍キャンプ・シュワブのゲート前で「県民大行動」が開かれた。北風が吹き、冷たい雨が降る中、県民をはじめ全国から約750人が集まり基地建設

反対を訴えた。・・・「第3回障がい者辺野古のつどい」も開かれ、参加者らは時折、白い息を吐きながら「なかなか健常者と同じように辺野古には来られないが、基地建設反対の気持ちは同じ」などと平和への思いを訴えた。・・・(琉球新報:12, 8)

○「辺野古に基地できてもヘリパッド撤去は不透明 実弾射撃演習、オスプレイ 騒音60デシベル超3487回」

米軍普天間飛行場の移設に伴う新基地建設が進む名護市辺野古区は、米軍キャンプ・シュワブ内の実弾射撃訓練や廃弾処理、上空を行き交う米軍機による騒音に悩まされている。沖縄防衛局が辺野古に2018年8月に設置した騒音測定器で、19年10月までの1年3カ月の間に記録した航空機騒音は、走行中の自動車内に匹敵する60デシベル以上の騒音が3487回に上る。辺野古区周辺のヘリパッドでは、日常的に米軍ヘリや垂直離着陸機MV22オスプレイなどの発着訓練が繰り返されている。名護市はヘリパッドの撤去を求めている。一方、沖縄防衛局は本誌の取材に「現時点で普天間飛行場移設事業の実施に合わせてヘリパッドを移設する計画はない」としており、撤去の実現性は不透明だ。防衛局の辺野古区での騒音測定でこれまで最大98.2デシベルを計測した。午後10時以降の騒音測定回数は一部期間で欠測のあった今年9、10月を除く平均は1カ月当たり21回だった。シュワブ内のヘリパッドのうち「LZフェニックス」は、沖縄高専のグラウンドから約300メートルの位置にある。渡具知武豊市長は9月、来県した河野太郎防衛相に対し、シュワブ内と、沖縄工業高等専門学校に近いヘリパッドを優先して撤去するよう求めた。(琉球新報:12, 14)

<編集後記>ドイツでも「平和の少女像」が設置されたら日本政府は抗議したという。過去の罪責を否定しようと躍起になる安倍政権は、沖縄にあらわな現在の人権無視政策もはばからない恥知らずの反社政権/下関市立大学での新学科強行設置・教授会無視の人事介入、京都大学での学生弾圧など権威主義的教育化が進行/祈り、発言し、行動しよう(K生)

780号ヤスクニ通信 2020年1月12日
発行 日本キリスト教会
靖国神社問題特別委員会
発行人 古賀清敬、編集 小塩海平、
発行 芳賀繁浩(日本キリスト教会大会事務所)